山田業広　医案④

往年遺精の癖ありて脳常に冷え、時々鼻血するものあり。其の人五十余にて虚弱の質なれば、腎を補うは脾を補ふに如かずといへるに本づき、帰脾湯を服せしむること、半年余にて愈えたり。『医説』巻五夢遺の条に、人あり。夢遺精。初めての所見あり。後来、夢中といえども見所なし。日夜拘らず。常々遺漏。心気不足なり。心気薬服すも験無し。腎気虚あり腎補う薬また験無し。患者医に問う。脳冷覚ず。之に応えて曰はく。只脳冷たり。寒駈散を服し遂に安んず。蓋し脳は諸陽の会。髄の海。脳冷則ち髄固らず。是以て遺漏なり。この疾があるは先ず脳中風冷を去る。脳気冲和し兼ねて心腎また薬を服し愈えざる」とあり。此証余が見るところと合す。いづれ補剤よろしき歟と覧ゆ。